（様式１）

学力向上のための重点プラン【小学校】

新宿区立戸塚第一小学校

■　学校の共通目標

授業づくり	重点	問題解決学習の展開、児童による課題づくり、児童相互の学び合いを中心とした主体的・対話的で深い学びをつくる指導方法の在り方を探る。	中間評価	校内研究と連携して全校で取り組んできたことで成果を上げることができた。今後は振り返りの観点をより明確に示し、継続的に児童の理解度を把握し、次時の課題へつなげていく指導を推進する。	最終評価	
環境づくり		全ての児童が主体的・対話的で深い学びを行うことができる学習基盤をつくる。学習・生活ルールを統一し、全ての児童が安心して学習に臨めるようにする。		「戸ースタンダード」の話し方・聞き方のルールを徹底したことや思考ツールの使い方を全教室に掲示したことで、全校で統一的な学習基盤をつくることができた。		

■　学年の取組み内容

学年	教科	学習状況の分析（10 月）	課　題（10 月）	改善のための取組み（10 月）	最終評価（２月）
1	国語	学 ・平仮名は、ほとんどの児童が読むことができるようになったが、音読に差がある。 ・文章を書くことに慣れ、書くスピードも速くなってきた。 ・漢字の学習が始まり、楽しんで学習しているが習得状況に差がある。 ・話したいことをみんなの前で話せるようになってきたが、聞くことに課題のある児童が多い。	・音読は、すらすら読める児童がいる一方、拾い読みをする児童もいる。 ・書きたいことを、文章に書き表せるようになってきたが、「は」「を」「へ」の使い方を始めとして、まだ誤字脱字が多い。 ・文の中での漢字の使い方が間違っていたり、漢字を使わないでひらがなで書いてしまったりする。書ける漢字も、文字の形が、きちんととれない児童がいる。 ・話している人の方を向いて聞いたり、話を最後まで聞いたりすることができない。	・音読は、家庭学習だけでなく、各教科で声に出して読む練習をする。 ・各教科の振り返りなど、文章を書く活動をなるべく毎時間行うようにする。また、学校行事等の体験を文章に表わし、それを互いに読み合うことを通して、適切な文章の表し方を身に付けられるようにする。 ・家庭での漢字学習で文章を使って書く練習を必ず取り入れる。また、書写の時間を通して、「とめ」「おれ」「はね」「はらい」に気を付けて書けるよう指導する。 ・友達から学び、良いところを取り入れることができるように、聞くときは全員発表者の方を向く等、しっかりと聞く態度を指導する。	
	算数	学 ・１０以内の加法や減法、繰り上がりのある加法については、大体の児童が理解できている。 ・既習の学習を生かして計算の方法を考えたり、説明したりすることができるようになってきた児童もいるが、課題のある児童もいる。 ・たし算、ひき算の意味をよく理解できていない児童がいる。 ・かさくらべなどの学習では、生活経験の不足が見られる。	・計算は、ほとんどの児童ができるが、速さに差がある。 ・計算の方法などを、操作や言葉などを用いて説明することを苦手としている児童がまだ多い。 ・たし算、ひき算などの計算や文章題はできるが、計算の意味をよく理解していないため、問題作りのできない児童が多い。 ・大きさの異なる容器に入れた水の量の比べ方など、授業で体験しても身に付いていない。	・家庭学習も含めて、毎日ドリル練習を行う。 ・算数ブロックなどの半具体物を用いた操作活動や、操作したことを言葉で表現する活動を授業で位置付ける。半具体物やＩＣＴ機器等を利用し、児童が自分の考えを発表する機会を設ける。 ・スモールステップで問題の意味を考えながら取り組めるような学習をしていく。 ・体験活動を算数でも十分に行い、何度も繰り返すようにする。	

学年	教科	学習状況の分析（４月）	課　題（４月）	改善のための取組み（４月）	中間評価・追加する取組み（10 月）	最終評価（２月）
2	国語	学思ったことや考えたことを、整理して話すことが十分できているとは言えない。 ・例文を参考にして文章を書くことができている。書きたい意欲はあるが、主語・述語が整ってなかったり、促音等の使い方がまだ十分でなかったりする児童が多い。 ・１年３学期から、読み書きのアセスメント指導（MIM）を行っているが、身に付けている語彙はまだ少ない。	・自分の思いや考えを整理して、相手に分かりやすく、根拠をもって相手に伝える力を身に付けること。 ・主語、述語を明確にし、相手に分かりやすい文章を書く力を身に付けること。 ・登場人物の気持ちや様子を、文章の表現に沿って読み取る力を身に付けること。	・話すことを文章に書いて、自分の考えを整理して話し合いや発表に臨む活動を取り入れる。 ・書く力の基礎を身に付けさせるために、マス目用紙を使った視写を行い、文を書く形式を身に付けられるようにする。 ・読み書きのアセスメント指導（MIM）や、言葉遊び、名文などの音読や視写を行うことで、語彙を増やし豊かにしていく。	・結論を先に言った後、「なぜかというと…」と理由 を述べたり、順を追って話したり書いたりすることができるようになってきた。 ・「主語」「述語」を意識させ、文章のねじれが無いか、書いたものを自分で読み直すことを促し、習慣付けるようにしていく。	
	算数	学 ・学習への意欲は高い児童が多い。 ・足し算・引き算の計算技術は身に付けている児童が多い。しかし、長さやかさ、時間などの単元では理解の差がある。 ・自分の考えを図や言葉で表現することには課題がある。	・自力解決の場面において、自分の考えを言葉や図を用いて分かりやすくまとめたり、説明したりすること。	・家庭学習や、朝学習等の時間を利用し、加減乗算の技能を身に付けられるようにする。 ・様々な数量や時刻の理解を深めるために、自分の生活に結び付くような体験活動を取り入れる。	・加減の計算の力についてはだいぶ身に付いてきた。確実に定着するように、計算、数量について、定期的に反復学習を行っていく。 ・全体での発表だけでなくペアやグループなどで、自分の考えを発表したり友達の考えを聞いたりする活動を行う。	

３	国語	調全体の正答率は、目標値よりも５ポイント高い値である。また、各領域の正答率についても全てにおいて目標値を上回っている。しかし、正答率分布を見ると、平均正答率の８３ポイントを下回る児童が２５パーセント程度見られる。全体の底上げのためにも苦手とする児童へのフォローが必要である。 学意欲的に学習に取り組む児童が多い。「読むこと」領域の学習では、音読の仕方の工夫を進んで話し合ったり場面の様子を読み取ったり場面が見られる。しかし、「書くこと」や「話すこと、聞くこと」の学習において、主述のつながりの誤りが目立ったり、意見とその根拠が結び付かなかったりする児童が多い傾向が見られる。	・既習漢字や新出漢字の習熟。 ・大切な点や一番伝えようとしている点を意識しながら集中して話を聞けずに、要点を捉えられないこと。 ・文章を書く力の育成。 （主述のつながりが誤った文章や意見と根拠が結び付かない文章が多い。）	・定期的に漢字の習熟を確認する小テストを行う。また、実施後は、誤答について練習をして、再度テストを行い、自己の習熟度の高まりを実感できるようにする。 ・自分の考えと比べながら話を聞く力を育てるために、より良い話の聞き方モデルを示すことが必要である。例えば、全校朝会での校長講話や友達のスピーチを聞いた際に内容をメモする活動を行うなど、要点を捉えられるようにする。また、話し手に対しても、意見と根拠を簡潔に述べるためのより良い話し方モデルを示す。 ・主語と述語を明確にしたミニ作文に取り組んだり、推敲指導に重点を置いたりして、自分の書いた文章を振り返ることができるようにする。	・漢字小テストと誤答の反復練習を行っている。再テストを実施すると満点を取ることができ、児童の達成感は高められている。しかし、問題文が変わると誤答が増えるため、様々な例文を用いたテストも行っていきたい。 ・国語科の「話す・聞く」単元で学んだことを他教科での話合い活動の際にも生かせるよう振り返りを適宜行っている。また、校長講話のメモや、テーマトークなど日常的な実践を重ね、聞く力を育てている。 ・推敲のポイントを児童とともに考え決めることで、必然性をもって推敲に取り組めるようにしている。また、推敲の段階で、児童同士で文章を読み合い、感想を交流することで、「相手に伝わる文章作り」を目的に取り組めるようにしている。	
	算数	調全体の正答率は、目標値よりも２ポイント高い値である。また、「数と計算」領域では同じく目標値を上回っている。しかし、「量と測定」領域では、６ポイント程度目標値を下回る結果が出た。特に「長さやかさ」の内容が大きく下回っている。更に、正答率分布を見ると、平均を下回る児童が４０パーセント程度おり、全体的に算数への苦手意識が見られる。 学算数の学習自体への参加意欲の高い児童の様子が見られる。「数と計算」領域については、得意とする児童が多いことがワークテストからも分かるが、「量と測定」領域への苦手意識の高い児童が多い傾向にあることが、日頃の発言や量感を問うような場面から分かる。	・量と測定の領域、特に長さや、かさに関する領域。 ・かけ算九九や長さやかさの量感、単位についての理解など、基礎・基本の習熟。	・量感を養うために、日頃から長さや、かさについての問いかけを行っていく。 ・苦手意識のある単元では、既習事項の復習の時間を設けたり、ドリル学習を行ったりして基礎基本の習熟を図る。 ・「「東京ベーシックドリル」」を活用し、自己の苦手とする領域を児童自身が認識し、課題意識をもって、基礎・基本の習熟のために学習を進めようとする態度を育てる。	・日常的に用いる単位とそうでない単位があるため、問い掛けの頻度も単位によって異なってしまう。小テスト形式など、取り組んだ問題が形として残ったり振り返りを行ったりできるようにする。 ・苦手意識のある児童に対して、授業の導入時に、問題練習に取り組む時間を作ったり、系統から見た前段階の学習の復習を取り入れたりしている。 ・「東京ベーシック・ドリル」の診断結果を活用しながら、苦手とする領域を自分自身で認識できるようにしたい。また、「東京ベーシックドリル」に取り組む頻度を増やしていく。	
４	国語	調２８年度の学力テストでは、読解力について目標値を上回ることができた。児童が学習テーマを立てることで、主体的に学習に取り組めたことが要因と考えられる。漢字の書き取りについては、目標値を上回ることができたものの、３年生の配当漢字を読む力が目標値に到達していない児童が目立つ。また、聞いた話の要旨を捉える力や、大切な情報を読み取る力に課題のある児童が多い。 学物語の読み取りに意欲的に取り組む児童が多い。一方で、自分の考えをノートにまとめて表現する力については課題がある。	・平仮名、片仮名、漢字、何を用いるかを理解し、活用すること。 ・相手の話の目的や意図を捉えながら、自分の考えと比べて共通点や差異に気付いたり、関連して考えたことなどを整理したりすること。 ・学習のまとめや思ったこと、考えたことを文章で表現すること。	・漢字の学習で単語を集める活動などを行うことで、児童が多くの言葉に触れる機会を確保していく。また、語彙の拡充を図るため、国語辞典や漢和辞典を活用できる学習環境や場面を設定する。 ・相手の考えと自分の考えを比べながら聞くなど、相手の話を聞くときの要点や、思考のスキル（比較・関連付けなど）を指導する。 ・どのように学習の振り返りを記述するのか、授業で学んだことや話し合ったことの中からキーワードを示すなどしてどの児童にも書きやすいようにする。	・多くの児童が、習った漢字は漢字で書き、分からない漢字は辞書等を用いて調べるようになってきた。しかし、漢字の書きや読みの定着には課題が残る。小テストを今後も継続して行っていく。 ・事象に対して比較して考えることは、授業や授業以外でも活用している姿が多く見られるようになってきた。関連付けについては、思考ツールを活用するなどして、事象間の関連がつかめるようにしていく。 ・授業最後の振り返りを継続して行ってきたことで、視点を提示しなくても書ける児童が多い。今後も継続して指導する。	
	算数	調２８年度の学力テストでは、算数を苦手とする児童の引き上げに成果が見られた。達成率、標準スコアともに上昇している。「東京ベーシックドリル」やテストに適時取り組み、児童が苦手な問題を分析し、復習してきたことが要因と考えられる。学力調査の質問事項について、「どの層においても考えていると」出ており、児童が問題解決型の学習の中で成果を出したと言える。 学算数の学習自体への意欲は全体的に高く、問題解決的な学習の流れにも慣れてきている。また、習熟が不十分な児童は、基本的な四則演算に、習熟が十分な児童については、問題を解く力はあるものの、解き方を言葉や図を使って説明することに課題がある。	・量と測定の領域、特に、時間に関する問題に対応すること。 ・解答を導き出した過程について、言葉や図を活用して説明すること。	・算数の授業に限らず、日常生活の中でも意識付けて時間について考える機会をもてるようにする。 ・どのような手順で解答したのかを説明する場面を計画的に設けるとともに、児童が友達に説明したいという意欲を高められるよう、課題提示の内容や方法を工夫したり、発展的な課題を取り入れたりする。 ・家庭学習や朝学習等を活用し、基本的な四則演算や学年相応の基礎的・基本的な事項の学習内容に取り組むようにする。	・日常生活の中での意識付けはしているものの、理解度が判定できないため、東京ベーシック・ドリル等で量と測定の領域に関する課題に取り組むようにしていく。 ・児童自身が説明する活動を多く取り入れ、指導を繰り返し行ってきた。ペアやグループなど意図的な活動を取り入れて、どの児童も説明できる学習場面をさらに設定していく。 ・基礎的・基本的な事項については習熟度別に見ていくと、理解度に差が開きやすい。繰り返しドリルや東京ベーシックドリルの活用をさらに行うとともに、家庭とも連携して定着に努めていく。	

５	国語	調学力テストの正答率は目標値よりも８ポイント以上高い値である。昨年度の課題であった「漢字を書く」項目は目標値より１１ポイント以上伸びている。正答率の分布をみるとおおむね目標値を達成しているが、６０%未満の児童が２割程度見られる。 学学習に対して意欲的に取り組んでいる児童が多いが、指示待ちになっている児童も多い。学力テスト上では漢字の成績が上がったが、ノートなどでは誤字が多くあり、漢字を書く力は依然として課題となっている。	・目標値は超えているが、「話すこと・聞くこと」および「説明文の内容の読み取り」が他の領域に比べ苦手となっていること。 ・主体的に「読むこと」に取り組む姿勢。 ・漢字、語彙の力。	・物語文では初発の感想等をもとに学級全体で学習課題をつくる。説明文では文章から言い回しを学び表現力を高め、それを活用した作品作りを行うことで定着を図る。 ・漢字小テストを定期的に実施したり、家庭学習と連携した取組みを行ったりするなど基礎・基本の定着を図る。 ・区立図書館の団体貸出を活用するなど、すすんで図書資料を利用できる環境をつくる。幅広い読書を図書館支援員と共に促していく。	・書かれてある文章の組み立てを捉える力を身に付けていけるよう、段落指導教材を活用し、文章の構成や要点を理解できるよう指導していく。 ・ドリルや学習シートを活用して、漢字などの基礎的な力が身に付くよう、継続的に取り組ませる。 ・説明的文章の要点、要約、要旨を理解し、自分の力で読解を進めていけるよう、短い教材を活用していく。	
	算数	調全体としてはおおむね目標値を超えているが、数量関係（折れ線グラフの活用）について課題がある。また正答率度数分布から、６０%と９０%に山があり、二極化の傾向が見られる。 学学習には意欲的に取り組んでいるが、問題解決のために友達と協働的、対話的な学習を行っていくことが不慣れである。問題が解けていても、問題を解いたときの自分の考えを説明したり、友達に教えてあげたりすることに課題が見られる。	・折れ線グラフから数量関係を読み解くこと。 ・記述式の答え方。 ・自分の考えを図や文章で書き表し、伝えること。 ・友達と問題解決に協働的に取り組むこと。 ・習熟度の二極化傾向への対応。 ・基礎的、基本的な知識・技能の定着。	・「東京ベーシックドリル」をはじめとした基礎、基本の定着を図る取り組みを継続して実施する。 ・主体的に問題解決する力を高めるため、習熟度別のコースにおいても、「課題をつかみ・自分の考えをもち・集団で解決する」ことを、児童の実態に応じた支援とともに実施する。 ・記述式の解答に答えるための表現力を育成するため、言葉、数、式、図、表、グラフを用いて、自分の考えを友達に説明する活動を授業の中に位置付ける。 ・児童が友達に説明したいという意欲を高められるよう、課題提示の内容や方法を工夫したり、発展的な課題を取り入れたりする。	・朝学習や家庭学習の時間に「東京ベーシック・ドリル」や市販の計算ドリルを反復して取り組んだことで、基礎、基本が定着してきている。 ・問題に対し、自分で考える「自力解決」の時間の十分な確保及び考えの交流の充実を図り、既習事項と結び付けて様々な解法を学び合うようにする。 ・児童の実態に応じて、発展的な問題に取り組ませたり、自ら問題作りをしたりして、学習意欲の向上を図る。	
６	国語	調教科としての達成率は、２７年度と２８年度を比較すると２．３ポイント伸びており、特に「読むこと」領域においては、２７年度は目標値を１３．１ポイント上回っている。ただし、「書くこと」領域は目標値を９ポイント下回っており、課題が見られる。 学教科に対する意欲はあり、学習に前向きに取組むことができる。ただし、読み取ったことや想像したことを表現することに課題を抱える児童が多く、特に「書いて表現」することとなると、苦手意識から前向きに取り組めない場面もある。	・読む力の基礎基本の習得。 ・書かれてある表現から、想像を広げて読む力。 ・書く力の育成。 （構成を立てる力、構成に沿って書く力、書いたものを推敲する力） ・メモを基に表現を工夫しながら話す力。 ・習得した漢字を正しく読んだり書いたりする力。	・文章を読んで、要点を正しく捉えたり、設定を捉えたりする力を身に付けられるように、段落指導教材を活用する。 ・言葉や文章のまとまりから想像する活動を文学的文章の学習の際には重視して取り組む。 ・論理的文章の構成や書き方を理解できるよう指導し、４００字短作文を定期的に書く。 ・調べたことをポスターにまとめて表現する「ミニ研究発表」を２学期から取り入れる。	・文学的・説明的文章において、個々が読みの課題を設定し、主体的に文章に向かい合っていけるよう、初発の感想の表現方法を工夫することで、課題をつかみやすくしていく。 ・卒業文集の作成に向けて、効果的な表現方法や文末表現が身に付くよう教師が意識して指導を行っていく。 ・４００字短作文では、段落構成を意識しながら書く経験を積み上げている。時間の配分にも慣れが見られるようになった。 ・書く活動では、カリキュラム・マネジメントを意識した意図的な題材設定を行うなど、主体的に学習に取り組めるよう工夫をおこなった。	
	算数	調教科としての達成率は、２７年度と２８年度を比較すると４ポイント伸びている。ただし「図形」領域は、目標値を１２．４ポイントも下回り課題が大きい。また、正答率度数分布からは学力分散傾向が見られ、個に応じた指導の充実が求められている。 学児童によって、教科に対する意欲に大きな差がある。意欲の低い児童は、下学年からの学習の積み上げに課題があり、基礎基本となる四則混合の計算ができないために前向きに取り組めない様子が見られる。	・図形領域における習熟。 ・正答率の低い児童への個に応じた指導の充実。 ・正しく素早く計算をする力の向上。 ・下学年までに学習してきた内容の定着。	・図形領域は特に習熟度の「じっくり」コースの人数を少なくし、ボランティア等複数体制で指導に当たり、個別指導を充実する。 ・計算ドリルを活用した基礎・基本の定着と合わせて、家庭と連携をし、習熟および復習課題に取り組めるようにする。 ・早く正確に解く力を高めるために、時間を決めて計算問題に取り組めるようにする。	・図形や作図、数量関係についての単元を中心に、算数担当と打ち合わせを行い、意図的に人数調整を行うことで、個別指導の充実を図っている。 ・朝学習では東京ベーシック・ドリルや、計算ドリルを活用し、基礎・基本の定着や複習を行っている。 ・分数や小数の四則計算では時間内に正確に解くことを目標に取り組んでいるが、年間を通した継続的な取り組みが必要である。	
音楽	学 ・低学年では、互いの楽器の音や伴奏を聴き、音を合わせて演奏する技能が身に付いてきた。友達と関わり合って音楽活動をする楽しさを少しずつ感じ始めたところである。 ・中学年では、表現に対する思いや意図をもてる児童が多いが、思いや意図にあった表現をするための技能には個人差がある。 ・高学年では、思いや意図を表現するために、自分たちで楽譜を見て歌ったり、呼吸及び発音の仕方に気を付けて響きのある歌い方で歌ったりする技能の向上に取り組んでいる。		・表現に対する思いや意図はもてるが、表現につなげる技能の定着。 ・表現力の向上 （音楽を形づくっている要素と音楽における働きの関わりを理解すること。） ・様々な発想をもつための音楽づくりの経験不足。	・思いや意図の根拠となる音楽的要素を明確に意識した常時活動を取り入れ、音楽的要素を表現につなげる手順を考えられるようにしていく。 ・基礎・基本の定着のため習熟度グループ活動を取り入れ、習熟度が低いグループには簡単な楽譜等を使いスモールステップの学習計画を立て、基礎的な技能の定着を図る。 ・協働的な学びに取り組みやすい音楽づくりの活動では、少人数グループ活動を取り入れ、試行錯誤しながら自分たちで音楽をつくりあげ表現し合う経験を増やしていく。	・基礎練習を毎時１０分程度取り入れ、技能の向上に努めている。今後は、ふりかえりカードを活用し、自己の課題や到達度を児童自身が把握し、改善できるようにしていく。 ・課題のある児童は、担任と相談し、休み時間等、個別指導ができる時間を設け、基礎・基本的な技能の定着を図っていく。 ・低学年でもグループで音楽作りの学習を行えるようになってきた。今後はタブレットＰＣを思考ツールとし、互いの思考の過程も比較したり、つなげたりできるようにしていく。	

図工	学 ・低学年は、実際に見たり、触ったりすることなど、身体の感覚を働かせた表現を得意とする。 ・中学年は、材料や道具などへの興味・関心が、表現活動への意欲となって発想を広げる傾向がある。 ・高学年は、今まで学んできたことを活用して自分なりの表現をする力が育ち始めている。	・個に応じた指導の工夫をし、課題をもつ児童には、休み時間等を活用して個別指導ができる時間の設定すること。 ・友達の話を聞いて、自分以外の人の、感じ方や表現の違いに気付けるような学習ルールの定着。 ・発想したことを表現につなげる見通しを人や物と関わりながら、見つけ出せるような指導の工夫。 ・イメージを膨らませ、自分の表現を具現化する過程で、考えを明らかにし計画的に進められるような授業づくり。	・課題がある児童に対して昼休みを活用し、個別指導ができる時間を設ける。 ・図工室のルールを明確にするとともに、鑑賞の時間を使って、児童が互いに話をしたり聞いたりする活動を充実する。 ・試しながら決めていく活動を繰り返す。その中で人と話したり、工夫を見付け出したりする機会を増やし、活動の見通しがもてるようにしていく。 ・ワークシートを活用して自分の考えを明らかにし、必要なものや手順を考えられるようにしていく。	・個に応じた指導の工夫をし、課題のある児童には、休み時間等を活用して個別指導ができる時間を設ける。 ・友達の話を聞いて、自分以外の人の、感じ方や表現の違いに気付けるよう、学習のルールを定着する。 ・発想したことを表現につなげる見通しをもてるようにするため、人や物と関わりながら、見付け出せる指導の工夫をする。 ・自分の表現を具現化する過程で、考えを明らかにし、計画的に進められるように、学習過程を工夫する。	
特支					

調…新宿区学力定着度調査の結果から見える学習状況　学…授業での様子や提出物、作品、ワークテスト等から見える学習の状況　※分量は２ページ以上となってもよい。